

## 2023年 棚田学会発表会のご案内

2023年11月  
棚田学会研究委員会

12月恒例の棚田学会発表会を、対面とオンライン併用方式で開催します。会員の皆様のご参加をお願いします。

### 実施要領：

日時：2023年12月2日（土） 13:00～17:30

会場：早稲田大学 早稲田キャンパス 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1丁目6-1

3号館3階 301教室（なお、Zoom ミーティングによるオンライン方式を併用します）

参加要領：参加者は棚田学会会員であることを基本としますが、各発表の関係者や学生（大学生、高校生）は聴講できます。参加をご希望の方は、次ページのリンク先の参加申込みフォームから登録してください。オンライン方式での参加者には、事前に参加要領をメールにてお送りします。

参加費：無料

### プログラム：

13:00～13:10 開会挨拶（山路会長）

13:10～13:40 「棚田米」のブランド形成に関する研究

菊地 稚奈（九州大学総合研究博物館）

13:40～14:10 四万十川上流域における堰堤と用水路による灌漑システムの展開

高田 亜沙里（農研機構 農村工学研究部門）

菊地 稚奈（九州大学総合研究博物館）

14:10～14:40 棚田オーナー制度と都市住民との交流についての考察

王 朝平（日本大学大学院国際関係研究科 博士後期課程2年）

（14:40～15:10 休憩）

15:10～15:40 上田市稲倉の棚田における各種保全活動・イベントの概況と課題

内川 義行（信州大学学術研究院（農学系））

老野 比奈美（長野県坂城町）

15:40～16:10 重要文化的景観・姨捨の棚田における耕作放棄地発生と復田の均衡構造について  
—耕地条件及び耕作主体の視点から—

富田 樹（信州大学大学院総合理工学研究科 修士課程1年）

内川 義行（信州大学学術研究院（農学系））

堀田 恭子（立正大学文学部）

16:10～16:40 持続可能な農業へ

松尾 光（一般社団法人岳乃百姓一揆）

16:40～17:10 若い世代を中心とした棚田の学びと維持の新しい動きについて

竹田 和夫（新潟大学非常勤講師）

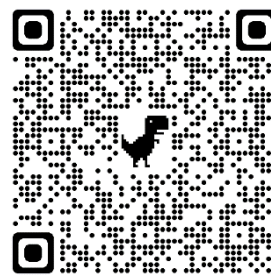
17:10～17:30 総括（上野副会長・研究委員長）、閉会の辞

### 注意事項：

- ✓ 各発表時間は約20分、質疑応答は約10分（交代時間を含む）とします。
- ✓ 対面方式でご参加の場合、会場でお使いいただける無線LAN設備は登録制となりますので、参加申し込みにより登録とさせていただきます（当日参加申し込みの場合は使用できません）。
- ✓ オンライン方式でご参加の場合、音声はつねにミュートに設定してください。発表に対する質問はチャットで受け付け、応答は口頭で行うことにします（時間の関係ですべての質問にお答えできない場合もあります）。チャットでの質問の宛名は「全員宛」とし、他の聴衆にも質問の内容が分かるようにしてください。

- 参加ご希望の方は、下記の参加申込書（外部リンク）または右のQRコードにて必要事項を入力し、送信してください。

<https://forms.gle/tnj6mCXVCY9qszs7>



- 郵便（〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 1-14-5-101 ふるきやら内 棚田学会）およびFAX（042-385-1180）で申込みのときは以下の項目をご連絡下さい。  
お名前 参加方法（会場参加・Web参加のどちらか） メールアドレス ご所属  
ご住所 電話番号 会員・学生・非会員の別
- お問い合わせ先：[tanada.ac@gmail.com](mailto:tanada.ac@gmail.com) 申込み締切日：11月25日（土）

※参加申込みの個人情報は棚田学会の事務連絡以外には使用いたしません。

**会場案内図**

早稲田大学 早稲田キャンパス 3号館 3階 301教室

<https://www.waseda.jp/top/access/waseda-campus>



**発表要旨**

① 「棚田米」のブランド形成に関する研究

菊地 稚奈（九州大学総合研究博物館）

棚田は平地にくらべ収益性が低いとされるが、そこで生産される米は持続のために欠くことができない財源であり、安定した収益につながることを望ましい。本研究は、それに向けた知見として、新聞記事分析、道の駅へのアンケート、ふるさと納税における販売状況の調査、さらにヒアリングやワークショップなどを実施し、「棚田米」の概念の社会的認知およびブランド価値を明らかにした。さらに、ブランド理論を援用して「棚田米」のブランド構造を考察した。

## ② 四万十川上流域における堰堤と用水路による灌漑システムの展開

高田 亜沙里（農研機構 農村工学研究部門）

菊地 稚奈（九州大学総合研究博物館）

高知県中土佐町大野見地区は「四万十川流域の文化的景観—上流域の農山村と流通・往来」として重要文化的景観に選定されており、特に川沿いに展開する棚田は景観の重要な要素となっている。そこで、これらの棚田を維持するための堰堤および用水路について調査し、地理的要因について分析を行った。本流沿いの水田であっても、遠く支流から引水されており、特に下流ではその水路延長が長いこと、堰堤はさまざまな形式のものが存在し、長い時間をかけて少しずつ更新されてきていることなどが明らかになった。

## ③ 棚田オーナー制度と都市住民との交流についての考察

王 朝平（日本大学大学院国際関係研究科 博士後期課程2年）

本研究は、棚田保全の対策として効果がある「棚田オーナー制度」と「都市住民との交流」に着目し、今後の棚田保全活動の取組みについて検討した。その結果、都市に住む人々が棚田を訪れ、農作業等を体験することで、棚田が保全されるだけでなく、中山間地域全体の自然環境も守る効果があり、さらに都市住民との交流、および農産物の購入や棚田の周辺施設の利用等は、棚田地域の活性化に繋がる効果があることが確認できた。

## ④ 上田市稲倉の棚田における各種保全活動・イベントの概況と課題

内川 義行（信州大学学術研究院（農学系））

老野 比奈美（長野県坂城町）

長野県上田市稲倉の棚田は「眺めるだけじゃないカカワレルタナダ」として棚田米・酒米オーナー制度をはじめ、棚田CAMP やししおどし祭り等、複数の保全活動・イベントを積極的に実施し、高い評価を受けてきた。本研究では、①これら活動・イベントの概況と収支実態、②保全委員会への聞き取りから、なお厳しい財政状況と課題について明らかにした。また、③道路・水路の区画条件についても踏査・把握から、改善の必要性が示唆された。

## ⑤ 重要文化的景観・姨捨の棚田における耕作放棄地発生と復田の均衡構造について

—耕地条件及び耕作主体の視点から—

富田 樹（信州大学大学院総合理工学研究科修士課程1年）

内川 義行（信州大学学術研究院（農学系））

堀田 恭子（立正大学文学部）

重要文化的景観選定地・姨捨の棚田において2006年と2022年の土地利用を比較し、特に耕作放棄地に着目して分析した。結果、道路・水路の接続がない地元農家の耕作する土地で耕作放棄が進んでいた。一方、保全団体が復田・耕作した土地により相殺されることで、水田耕作面積が維持されているという構造が明らかになった。しかし保全団体も資金や後継者不足等に課題があり、耕作主体を含めた新たな保全策の検討が必要なが示唆された。

## ⑥ 持続可能な農業へ

松尾 光（一般社団法人岳乃百姓一揆）

日本棚田百選の【岳の棚田】で米作りや棚田の保全活動をする為に地元の若い3人組で集結し「一般社団法人岳乃百姓一揆」が出来ました！今、体感として農業は危機的狀態に瀕しているのは物凄く感じます。この美しい棚田を未来の子ども達に残す為に、保全活動の他に地元企業と連携し、棚田でさまざまなイベントや映像配信を行い活動しています。

## ⑦ 若い世代を中心とした棚田の学びと維持の新しい動きについて

竹田 和夫（新潟大学非常勤講師）

近年、棚田を対象にした小中高の教育プログラムや文理融合のクラブ活動がみられるようになってきた。大きく変わる教育のうねりの中に「点」ではあるが、棚田への関心が高まっている。これと並行して、社会活動においても、若い世代が主体となった棚田維持のための事業が展開されるようになってきた。報告ではこれらの動向を整理し、次代を担う世代の視点から棚田について考える切り口を提起したい。